

中原中也『夜汽車の食堂』論

——響き合う賢治・中也・みすゞの作品群——

林 伸 一

1. はじめに

2024年1月21日ボランティアグループの山口の朗読屋さんの企画制作で紙芝居『夜汽車の食堂』が発表された。同紙芝居は、中原中也の童話「夜汽車の食堂」をもとに、さとうみちこ氏が絵を描く形で作られた。本稿では、紙芝居を企画制作し、実演する朗読者の視点から、中原中也『夜汽車の食堂』論の検討を試みたい。紙芝居の原画を本文の該当箇所を示す。

まず、中也の「湖上」「一つのメルヘン」「冬の夜汽車で」「北の海」など他の作品と「夜汽車の食堂」の関連性を考えてみたい。次に宮沢賢治の作品「銀河鉄道の夜」「氷河鼠の毛皮」「月夜のでんしんばしら」「青森挽歌」などからの影響を考える。最後に、金子みすゞの作品「金平糖の夢」「ねんねの汽車」などに使われているキーワードを中心に関連性を考える。

原作・原文の旧仮名遣いは、そのまま用いるようにしたが、促音の「っ」については、小さい「っ」に改めた。詩などの作品で、改行がある場合には、／を用いた。

2. 中原中也自身の他の作品との関連性を考える

中也の「冬の夜汽車で」(1927)「湖上」(1930)「一つのメルヘン」(1936)などと「夜汽車の食堂」(1935)の関連性を考えてみたい。中也と賢治の作品は、縦書きであるが、本稿では詩以外は、比較検討のために横書きで示すこととする。

2-1. 冬の夜汽車で (1927) <原文縦書き>漢字のルビは () 内に示した。

汽車ゴーと鳴って 息絶えるも……／でも食堂は明るくてね 囁 (かき) フライ橙酢 (だいだいず) 搾らなくてばならないわ 肩脊 (かたせな) 寒くて 口惜しくてね／汽車ゴーと鳴って この橙酢酸っぱいわ
--

「冬の夜汽車で」は「夜汽車の食堂」と似た状況設定であるが、詩と見るか、創作素材の断片 (メモ) と見るかは、見解の分かれるところであろう。いずれにしても、「冬の夜汽車で」が後の童話「夜汽車の食堂」のモチーフであり、出発点と言えるであろう。終助詞「わ」が二回使用されており、列車内で耳にした女性の会話を書き止めたとも考えられる。「汽車ゴーと鳴つて」を二回繰り返している。

この「冬の夜汽車で」は1927 (昭和2) 年の「新文芸日記 (精神哲学の巻)」の「十二月十三日」にある。(注1) 『新編中原中也全集・第五巻 (日記・書簡)』(pp.106-107) では、1927 (昭和2) 年十二月十三日付の「日記」という扱いになっている。

ちなみに1927（昭和2）年5月には「汽車汽車ポッポポッポシュッポシュッポシュッポッポ」で始まる童謡の「汽車ポッポ」（本居長世作詞作曲）が発表された。

中原中也の「夜汽車の食堂」は『新編中原中也全集/第四巻/評論・小説』角川書店2003（平成15）年11月25日初版発行に「童話」として掲載されている。「夜汽車の食堂」は、1934（昭和9）年10月～1935（昭和10）年1月制作（推定）としている。以下、本稿では、1935年の作品として扱うことにする。

『新編中原中也全集 第四巻 評論・小説』では、「夜汽車の食堂」のほかに「山間秘話」と「家族」の合計三作を「未発表童話」としている。長山靖生篇（2017）『詩人小説精華集』の中では中也の「夜汽車の食堂」「散歩生活」「我が生活」の三作が掲載されている。この三作を長山靖生は、＜詩人が書いた小説＞と位置付けている。

2-2. 中原中也「湖上」における「月」の表現（1930年8月『桐の花』第十三号で発表）

湖 上	中 原 中 也	ポツカリ月が出ましたら、	舟を浮べて出掛けませう。	波はヒタヒタ打つでせう、	風も少しはあるでせう。	沖に出たらは暗いでせう、	櫂から滴垂る水の音は	昵懇（ちか）しいものに聞こえませう、	あなたの言葉の杜切れ間を。	月は聴き耳立てるでせう、	すこしは降りても来るでせう、	われら接唇（くちづけ）する時に	月は頭上にあるでせう。	あなたはなほも、語るでせう、	よしないことや拙言（すねごと）や、	洩（も）れさず私は聴くでせう、	——けれど漕ぐ手はやめないで。	ポツカリ月が出ましたら、	舟を浮べて出掛けませう、	波はヒタヒタ打つでせう、	風も少しはあるでせう。
--------	------------------	--------------	--------------	--------------	-------------	--------------	------------	--------------------	---------------	--------------	----------------	-----------------	-------------	----------------	-------------------	-----------------	-----------------	--------------	--------------	--------------	-------------

『中原中也全詩集・中原中也』角川文庫、2007年発行参照／「月」の表現（太字・筆者）

七五調の詩で、四行ずつの五連からなる中也「湖上」の読者は、「夜汽車の食堂」の冒頭の「雪の野原の中に、一条のレールがあって、そのレールのずっと地平線に見えなくなるあたりの空に、**大きなお月さまがポツカリと出てみました**」で中也の作品と気づくであろう。

「舟を浮べて出掛けませう」という湖上の出発場面と「夜汽車」に乗って出かける場面が、月夜の物語の始まり部分として重なり、その後の展開を期待させる効果がある。

ただ、「湖上」は、ロマンチックな展開があるのに対して、「夜汽車の食堂」では、もしもメルヘンの世界を期待していたとしたら、読者は裏切られることとなる。

「湖上」では、「**ポツカリ月が出ましたら**、舟を浮べて出掛けませう」の開始部分から「**月は聴き耳立てるでせう**」と月を擬人化させ、「**月は頭上にあるでせう**」と月に時間の経過を知らせる役割を与えている。最後の連が最初の連の繰り返して終わっているのは、時間（月日）の経過の循環性を示していることになる。

3. 文体（文末表現）と比喩（直喩）

3-1. 中原中也「夜汽車の食堂」1935（下線部：比喩・太字：筆者）＜原文縦書き＞

レールの片側には、真ッ黒に火で焦がされた、太い木杭が立ち並んでゐて、レールを慰めてゐるやうなのでありました。そのレールの上を、今、円筒形の、途方もなく大きい列車が、まるで星に向かって放たれたロケットのやうに、遮二無二走って行くのでした。（略）かうして一人でお星の方へ旅することが、なんだか途方もなくつまらなくなるのでありました。



中也の「夜汽車の食堂」では、「レールの片側には、真ッ黒に火で焦がされた、太い木杭が立ち並んでゐて、レールを慰めてゐるやうなのでありました。（中略）かうして一人でお星の方へ旅することが、なんだか途方もなくつまらなくなるのでありました」と「…のでありました」「…のでした」で終る文末表現を特徴としている。以下に示す中也の

「一つのメルヘン」にも同様の特徴が見て取れる。

3-2. 中原中也「一つのメルヘン」1936（昭和11）年『文芸汎論』11月号に発表

一つのメルヘン

中原中也

秋の夜は、はるかの彼方（かなた）に、
小石ばかりの、河原があつて、
それに陽は、さらさらと
さらさらと射してゐるのでありました。

陽といつても、まるで硃石（けいせき）
非常な個体の粉末のやうで、
さればこそ、さらさらと
かすかな音を立ててもゐるのでした。

さて小石の上に、今しも一つの蝶がとまり、
淡い、それでゐてくつきりとした
影を落としてゐるのでした。

やがてその蝶がみえなくなると、いつのまにか、
今迄流れてもゐなかつた川床に、水は
さらさらと、さらさらと流れてゐるのでありました……

『中原中也全詩集・中原中也』角川文庫、二〇〇七（平成一九）年初版発行／中原中也著・石井昭影絵・福田百合子監修（一九九六年）『中原中也・よれつちまった悲しみに……』新日本教育図書

ソネット形式（4行連が2回、3行連が2回） ＜傍線部：比喩、太字・筆者＞

中也の「夜汽車の食堂」や「一つのメルヘン」に見られる「…のでありました」「…のでした」などの文末表現は、形式名詞「の」を用いることにより、一旦体言化（名詞化）して、客観的に事態を描写する印象を与える。口頭報告の「ん」（「…んです」「…んでした」）に通じる面もあり、語り手（レポーター）が物語の展開を読者に分かりやすく説明しながら、語る（報告する）ような文体と言えるだろう。名柄ら（1987）は、形式名詞「の」の用法として「強調が含まれた説明」を挙げているが、読者に分かりやすく説明するために、具体的な例を比喩として用いることとなる。

中也の「夜汽車の食堂」の「ルールを慰めてゐるやうなのでありました」は、「あたかも」「まるで」などの表現を文頭に入れると直喩（明喩）ということが、明らかとなる。

「まるで星に向かって放たれたロケットのやうに、遮二無二走って行くのでした」の文例が、「まるで・・・のやうに・・・のでした」という文型の典型例となる。

「一つのメルヘン」の「まるで硅石か何かのやうで、非常な個体の粉末のやうで、さればこそ、さらさらとかすかな音を立ててもゐるのでした」も同様で、中也の作品の中で、比喩表現と文末表現が連動していると言ってもいい例である。

「ルールを慰めてゐる」とは、文学的な表現であるが、「星に向かって放たれたロケット」などは、少年らしい連想で、「硅石か何か」や「非常な個体の粉末」などは、鉱物学など自然科学に興味・関心のある人の発想という印象を与える。

3-3. 北の海 『在りし日の歌』（1935）（太字・筆者）

日本教育図書	合子監修（一九九六）『中原中也・よこれつつまいった悲しみに…』新	中原中也著・石井昭影絵・福田百	年初版発行	角川文庫、二〇〇七（平成一九	『中原中也全詩集・中原中也』	海にあるのは、 あれは人魚ではないのです。 海にあるのは、 あれは、浪ばかり。	雲（くも）った北海の空の下、 浪はところどころ歯をむいて、 空を呪ってゐるのです。 いつはてるとも知れない呪。	北の海	中原中也

中也の「夜汽車の食堂」と「一つのメルヘン」と『在りし日の歌』30番目の「北の海」は、ほぼ同時期に書かれた作品である。「北の海」は、1935（昭和10）年2月の作品で、『歷程』の昭和10年5月号に掲載された。中也としては「夜汽車の食堂」で童話執筆を試みたが、「僕はお母さんやお父さんを離れて、かうして一人でお星の方へ旅することが、なんだか途方もなくつまらなくなるのでありました」と心情を吐露している。「お星の方へ旅することが、なんだか途方もなくつまらなくなる」とは、童話（メルヘン）の世界に筆を進めることに興味を持てなくなるという意味にも解釈できる。

「北の海」では「海にゐるのは、**あれは人魚ではないのです**」と空想世界を否定している。

名柄ら(1987)は、形式名詞「の」の用法として、「主張・命令的な気持ちを表す説明」を挙げている。「人魚ではない」との否定は、作者の主張を表しているだけでなく、名柄ら(1987)の「自分で自分に言い聞かせる、自分を納得させる含みがある」という解釈ができる。第一連での「海にゐるのは、**あれは人魚ではないのです**」という断定的な否定表現が第三連でも繰り返しているが、そのリフレインは、「自分で自分に言い聞かせる、自分を納得させる含みがある」と見てよいだろう。

「北の海」の「海にゐるのは、あれは、浪(なみ)ばかり」と虚無感を表出している。海に人魚を登場させるような童話(メルヘン)の世界をきっぱりと否定するダダイズム(既成の秩序や常識に対する、否定、攻撃、破壊の思想)に通じると言っていーいだろう。

4. 宮沢賢治の作品群と中也「夜汽車の食堂」(1935)の事物に関する表現比較

中也は賢治の作品から影響を受けたとされているが、ここでは「氷河鼠の毛皮」(1923)「青森挽歌」(1923)「月夜のでんしんばしら」(1924)「銀河鉄道の夜」(1934・注2)などの賢治の作品群と中也「夜汽車の食堂」(1935)の事物に関する表現技法を検討したい。

2003年に、いいだももと中村稔が「銀河鉄道の夜」と「夜汽車の食堂」をめぐる対談しているが、細部にわたって言及しているわけではない。(『中原中也研究』第八号参照)

賢治の「氷河鼠の毛皮」(1923)の「十二月の二十六日の夜八時パーリング行の列車に乗ってイーハトヴを発った人たち」の物語と「冬の夜汽車で」(十二月十三日)の日付が近い。

4-1. 月の表現(下線・太字:筆者)

向ふでは山脈の雪が耿々(かうかう)とひかり、その上の鉄いろをしたつめたい空にはまるでたったいまみがさをかけたやうな青い月がすきっとかいてゐました。(略)若者はやっぱり外を見てゐました。月の下にはまっ白な蛋白石(たんぱくせき)のやうな雲の塊が走って来るのです。(略)窓は月のあかりでまるで螺鈿のやうに青びかり みんなの顔も俄かに淋しく見えました。	宮沢賢治「氷河鼠の毛皮」1923 (下線部:比喩)
九日の月がそらにかいてゐました。(略)うろこぐもはみんな、もう月のひかりがはらわたの底までもしみとほってよろよろするといふふうでした。	宮沢賢治「月夜のでんしんばしら」1924
雪の野原の中に、一条のレールがあって、そのレールのずっと地平線に見えなくなるあたりの空に、大きなお月さまがポツカリと出てみました。(略)僕は怖くなって、とてもそのアメリカの小母さんの顔が見てはゐられなくなって、窓の方に眼を向けると、雪の原には月が一面に青々と光って、なんだか白熊たちは雪達磨をこしらえてゐるのです。(略)汽車はゴーツといつて、青い青い雪の原を、何時までも停まらず走り続けました。	中原中也「夜汽車の食堂」1935

賢治の「氷河鼠の毛皮」の「窓は月のあかりでまるで螺鈿のやうに**青ばかり**」と中也の「夜汽車の食堂」の「雪の原には月が一面に**青々と光って**」が呼応している。

月そのものを「**青い月**」と表現したり、月の光を「**青ばかり**」と表現したり、月に照らされた雪原を「**青い青い雪の原**」と表現するような例は、他にも見られる。白いはずの雪原を「**青い青い雪の原**」としているのは、車窓の外の寒々とした雪の原の寂しさも表現したかったのであろう。

ちなみに「**青い月**」を英語で言う**とblue moon**「ブルームーン」となる。「ブルームーンとは、一般的な月の満ち欠けとは異なる現象であり、一年に数回しか見られない希少な出来事です。この現象は、一般的な月の周期である約29.5日より長い周期で起こるため、月が2回満月となる現象として知られています。ブルームーンは、月の色が通常の白色ではなく、青色に見えることからその名前がつけられました。(略)現代でも、ブルームーンを見ることが幸運を呼ぶと信じられている人も多くいます」と『Shoplyワード辞典』に示されている。(注3)

賢治や中也の「青い月」の寂しさと幸運を呼ぶblue moon「ブルームーン」とは、対照的と言えるだろう。ちなみに菅原都々子の「月がとっても青いから」は、1955年5月発売の曲であるが、歌詞と曲調からは、幸運を呼ぶblue moon「ブルームーン」に近いように思われる。

4-2. 汽車・列車・レールに関する表現（下線・太字：筆者）

十二月二十六日の夜八時 ベーリング行きの列車 に乗ってイーハトヴを發った人たちが、どんな眼（め）にあったか、きつとどなたも知りたいでせう。(略) ベーリング行きの最大急行 に乗る人たちはもうその前にまっ黒にたつてゐました。	宮沢賢治「氷河鼠の毛皮」1923
客車のまど はみんな水族館の窓になる (略)／ わたくしの汽車は北へ走ってある はずなのにここではみなみへかけてある (略)／ 汽車の逆行 は希求の同時な相反性 (略)	宮沢賢治「青森挽歌」1923
おまけにも し汽車 がきて、窓から長い棒などが出てゐたら、一ぺんになぐり殺されてしまったでせう。(略) 窓から棒の出た汽車 にもあいませんでした。(略)「あ、いかん、 汽車 がきた。(略)」	宮沢賢治「月夜のでんしんばしら」1924
気がついてみると、さっきから、ごとごとごとと、ジョバンニの乗っている 小さな列車 が走りつづけていたのです。(略) 白くあらわされた天の川の左の岸に沿って 一条の鉄道線路 が、南へ南へとたどって行くのです。(略) ごとごとごとと 、その 小さなきれいな汽車 は、そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の 青じろい微光の中を 、どこまでもどこまでもと、走って行くのです。	宮沢賢治「銀河鉄道の夜」1934
雪の野原の中に、 一条のレール があって、そのレールのずっと地平線に見えなくなるあたりの空に… (略) そのレールの上を 、今、 円筒形の、途方もなく大きい列車 が、まるで 星 に向って放たれた ロケット のやうに、遮二無二走って行くのです。(略) 汽車はゴーツ といって、 青い青い雪の原を 、何時までも停まらず走り続けました。	中原中也「夜汽車の食堂」1935 (下線部：比喩)



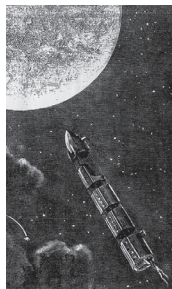
賢治の「銀河鉄道の夜」(三起商行発行、2013)で「一条(いちじょう)の鉄道線路」とされているところが、中也の「夜汽車の食堂」では、「一条(ひとすじ)のレール」となっている。また「銀河鉄道の夜」で「小さなきれいな汽車」としているのに対して「夜汽車の食堂」では「円筒形の、途方もなく大きい列車」と汽車の大きさの対比が見て取れる。

賢治の「氷河鼠の毛皮」では、「ベーリング行きの最大急行」と走行速度の速さが示されているが、「夜汽車の食堂」では、さらに「まるで星に向かって放たれたロケットのやうに…」と最大急行を追い抜くロケットの速さになっている。

1935年当時、汽車と言えば、箱型の車両であったが、ロケットのような速さと言えば、1964年開業の夢の超特急新幹線(時速200km)のイメージに近いのではないだろうか。新幹線のことを英語でbullet train(弾丸列車)と言うが、「円筒形の、途方もなく大きい列車」と言えば、1997年に登場した新幹線の500系(時速300km)の形状に近いのではないだろうか。先頭車両はロケットの先のようにとがっており、客室も円筒形なので、乗客は飛行機に乗ったと勘違いして、着席したら思わずシートベルトを探してしまうこともある。

500系新幹線とは、JR西日本が運行する新幹線の車両の一つで、東海道・山陽新幹線の最速列車「のぞみ」を牽引した。その流線型のデザインと高速性能は、多くの人々を魅了した。(クラブログ<https://clublog.club-t.com/>より)

中也は「夜汽車の食堂」の1935年に29年後の新幹線の開業を予見していたのであろうか。「新幹線計画の基礎となったのが、戦前の『弾丸列車計画』である」(1939年頃)とされている。(『鉄道の101の謎』梅原淳、河出書房新社2008参照)中也にとっては、近未来のイメージだったかもしれない。さらに中也は、ジュール・ヴェルヌの『月世界旅行』(1978)の挿絵(右)に近いイメージを描いていたのかも知れない。



賢治の「銀河鉄道の夜」では、「とごとととととと、その小さなきれいな汽車は、(略)三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのだ」と勢いは弱いものの、果てしなく走行しているように描かれている。作中、いくつかの駅に停車してはいる。

それに対して、「夜汽車の食堂」では、「汽車はゴーツといつて、青い青い雪の原を、何時までも停まらず走り続けました」と勢いよく無限に走る様子が描かれている。「何時までも停まらず」とノンストップ運行である。「汽車はゴーツといつて…」の部分が繰り返されているが、汽笛音は入っておらず、「シュッシュポッポ」というような蒸気機関車の擬音語もない。ということは、列車をけん引するのは、必ずしも蒸気機関車とは限らないということになる。

新幹線の開発者は、新幹線が走行時に出す音が周辺住民の迷惑になるとは夢にも思わず、クレームが出て初めて轟音の問題に気づき、慌てて線路わきに遮音壁を取り付けたという。

4-3. 柵・木杭について（太字：筆者）

枕木を焼いてこさへた柵が立ち（略）支手のあるいちれつの柱は、なつかしい陰影だけでできてゐる（略） 焼杭（やけぐい）の柵 はあちこち倒れ…	宮沢賢治「青森挽歌」1923
さっきから線路の左がはで、ぐわあん、ぐわあんとうなっていた でんしんばしら の列が大威張りで一ぺんに北のほうへ歩きだしました。（略）うなりもだんだん高くなって、いまはいかにも昔ふうの立派な軍歌に変わって…	宮沢賢治「月夜のでんしんばしら」1924
レールの片側には、 真ッ黒に火で焦がされた、太い木杭が立ち並んでゐて 、レールを慰めてゐるやうなのでありました。	中原中也「夜汽車の食堂」1935

中也の「夜汽車の食堂」には「レールの片側には、**真ッ黒に火で焦がされた、太い木杭が立ち並んでゐて…**」とあるが、それだけでは太い木杭の大きさや長さなど具体的なイメージが浮かばない。しかし、賢治の「青森挽歌」に「**枕木を焼いてこさへた柵が立ち（中略）焼杭（やけぐい）の柵**は…」とあるのを見ると納得がいく。その柵は、野原の中に敷設されているレールが雪で覆われて見えなくなった場合に、レールの位置を示すためのものであろう。「レールを慰めてゐる」とあり、寂しいレールを慰めるかのように木杭が立ち並んでゐると擬人化している。さらに、その擬人法が進むと動き出し、行進する「月夜のでんしんばしら」となる。

4-4. 電灯について（太字：筆者）

黄いろなランプ がふたつ点き（略）／車室の 五つの電燈 は／いよいよつめたく液化され（略）	宮沢賢治「青森挽歌」1923
汽罐車（きくわんしゃ）はもうすっかり支度ができて暖さうな湯気を吐き、 客車にはみな明るく電燈がともし 、赤いカーテンもおろされて、プラットホームにまっすぐにならびました。	宮沢賢治「氷河鼠の毛皮」1923
銀河ステーションと云う声がしたと思うといきなり 眼の前が、ぱっと明るくなって （略）ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、 小さな黄いろの電燈のならんだ車室 に、窓から外を見ながら座っていたのです。	宮沢賢治「銀河鉄道の夜」1934
その列車の食堂は明るくて 、その天井は白いロイドで貼ってあり、 飴色の電燈は、カッカと明って燈ってゐました。	中原中也「夜汽車の食堂」1935

賢治の「青森挽歌」の「黄いろなランプ」が中也の「夜汽車の食堂」の「飴色の電燈」に対応しているが、前者が「車室の五つの電燈はいよいよつめたく液化され」と表現されているのとは対照的に、後者は「飴色の電燈は、カッカと明って燈ってゐました」とある。灯油式の「ランプ」（もとはオランダ語のlamp）と「電燈」の明るさの差かもしれない。「明る」という動詞は、枕草子に「山ぎは少し明かりて…」と出てくる。それが「明って」と促音化した。

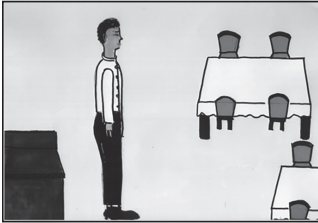
賢治の「氷河鼠の毛皮」も賢治の「銀河鉄道の夜」も中也の「夜汽車の食堂」同様に車内が明るいことがわかる。作品が書かれた当時の街灯や家の灯りは、列車内の電燈に比べ、それほど明るくはなかったのであろう。

5. 宮沢賢治の作品群と中也「夜汽車の食堂」(1935)の登場人物に関する表現比較

次に「氷河鼠の毛皮」「青森挽歌」「月夜のでんしんばしら」「銀河鉄道の夜」などの賢治の作品群と中也の「夜汽車の食堂」の登場人物に着目し、表現技法を比較してみたい。

5-1. 登場人物に関する描写 (太字・筆者)

ゆうべのその外套をほんとのモロッコ狐だと云った人は変な顔をして しゃちほこばってゐました。	宮沢賢治「氷河鼠の毛皮」1923
ぢいさんに見られた柱は、まるで木のやうに堅くなって、 足をしゃちほこばらせて 、わきめもふらず進んで行き、その変なぢいさんは、もう恭一のすぐ前までやってきました。	宮沢賢治「月夜のでんしんばしら」1924
僕が背ろを振り向くと、会計台の所には、白い上衣のボーイが一人立ってゐて、列車の動揺に馴れ切った脚つきで、でも シャチコバって立ってゐる のでありました。	中原中也「夜汽車の食堂」1935



賢治の「氷河鼠の毛皮」1923 (大正12) 年では、乗客が「**しゃちほこばってゐました**」とあり、賢治の「月夜のでんしんばしら」1924 (大正13) 年では、電信柱の兵隊が「**足をしゃちほこばらせ…**」と使役形で示し、軍隊イメージが伴っている。中也の「夜汽車の食堂」1935 (昭和10) 年では、ボーイが「**シャチコバって立ってゐる**」とある。(注4) 増井金典 (2021) 『日本語源広辞典 [増補版]』では「**しゃちこばる・しゃちよこばる**」を見出し語に立てて、次のように記述している。

「語源は、『鯰 (しゃち) + 鉾 (ほこ) + 張る (はる)』です。関西では、シャチホコバルが生きています。身体をこわばらせてかたくなるようすをいいます」。

5-2. 想定外の人物の登場と言動 (太字・筆者)

おれはその黄いろな服を着た隊長だ／だから睡いのはしかたない (中略) 《尋常一年生 ドイツの尋常一年生》いきなりそんな悪い叫びを／投げつけるのはいったいたれだ／けれども尋常一年生だ (略)／《ギルちゃんまっさをになってすわってゐたよ》 (略)／《ギルちゃん青くてすきとほるやうだったよ》	宮沢賢治「青森挽歌」1923 (／は、改行)
ぢいさんはほろほろの外套の袖をはらって、大きな黄いろな手をだしました。 恭一 もしかたなく手を出しました。 ぢいさんが「やっ、」と云ってその手をつかみました。 ／すると ぢいさんの眼だまから、虎のやうに青い火花がぱちぱちとでたとおもふと、恭一はからだがりびりりとしてあぶなくうしろへ倒れさうになりました。 ／「ははあ、だいぶびびいたね、これでごく弱いほうだよ。わしとも少し強く握手すればまあ黒焦げだね。」	宮沢賢治「月夜のでんしんばしら」1924

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声が起りました。ふりかえって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまっすぐにきものひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の珠数をかけたり、どの人もつつましく指を組み合せて、そっちに祈っているのです。	宮沢賢治「銀河鉄道の夜」 1934
僕が美味しい美味しいと、そのお魚フライを食べてみると、やがてツカツカと、白い大きいズーレをかぶり、青い洋服に薄い焦茶のストッキングをはいた、大きなアメリカの小母さんが這入って来ました。そして僕の耳を引っ張って、僕の頭を揺すぶりながら、「そんなにレモンをかけて食べる人ありますか！」と云ふのです。	中原中也「夜汽車の食堂」 1935



中也の「夜汽車の食堂」の「大きなアメリカの小母さんが」這入って来ました。そして僕の耳を引っ張って、僕の頭を揺すぶりながら、『そんなにレモンをかけて食べる人ありますか！』と云ふのです」というくだりは、この物語の山場である。突然、何の脈絡もなく、「大きなアメリカの小母さん」が登場して、「僕の耳を引っ張って、僕の頭を揺すぶりながら」小言を言うというより詰問するのである。理不尽という

だけでなく、現代の判断では、「体罰」「児童虐待」に当たる行為である。

仙台市の市立特別支援学校で2023年7月、女性教諭が担任をしていた中学部1年の男子生徒の耳をつまんで引っ張る体罰を加えたうえ、暴言を浴びせていたということが問題となった。

かつては、学校教育の中でも躰のために体罰が容認されていた時代があったが、「夜汽車の食堂」で「大きなアメリカの小母さん」は、主人公の「僕」に「そんなにレモンをかけて食べる人ありますか！」と咎める必要が果たしてあったのだろうかという疑問が沸く。

林（2024b）は、「絵本や紙芝居に見るヤングケアラーの問題」を子どもの人権の観点から論じているが、中也の「夜汽車の食堂」も「体罰」「児童虐待」に当たる場面があると指摘しておかなければならない。

賢治の「銀河鉄道の夜」の主人公ジョバンニも、父親の長期不在の中で、活版所で働き家計を支え、買い物や病気の母の世話をするヤングケアラーに相当する。

賢治の「青森挽歌」でも「黄いろな服を着た隊長」が尋常一年生に対して《ドイツの尋常一年生》といきなり悪い叫びを投げつけている。「**ギルちゃんまっさをになってすわってゐた**」と子どもが大人に威嚇され、怖がっている様子が描かれている。

賢治の「月夜のでんしんばしら」でも、主人公の少年恭一が突然現れた変なおじいさんと握手して、「わしとも少し強く握手すればまあ黒焦（くろこげ）だね」と脅される。大人と少年の身体接触を伴う強迫的な場面という点では、「夜汽車の食堂」と重なる部分である。

中也が「冬の夜汽車で」を書いた1927（昭和2）年には、アメリカから「青い目の人形」300体が到着し、全国の小学校に親善大使として贈られた。以来13,000体の人形が贈られている。この人形交換を進めたのは、渋沢栄一とされる。1935年の「夜汽車の食堂」には、唐突に「青い洋服に薄い焦茶のストッキングをはいた、大きなアメリカの小母さん」が登場するが、「青

い目」とは書かれていない。日本が満州の權益を獲得する情勢になると、中国進出を狙っていたアメリカとの間で政治的緊張が高まっていた。1930年代の日米関係が背後にあった。

日米の対立を懸念し、その緊張を文化的に和らげようと、アメリカから「青い目の人形」が贈られ、日本からは返礼として、渋谷栄一を中心とした日本国際児童親善会による呼びかけで、「答礼人形」と呼ばれる市松人形が日本からアメリカに渡り、全米の児童たちの歓迎を受けた上で各地の博物館・美術館などに寄贈された。(出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』「青い目の人形」より)

5-3. 白熊の登場 (太字・下線: 比喩・筆者)

そのあとから二十人ばかりのすさまじい顔つきをした人がどうもそれは人といふよりは白熊といった方がいゝやうな、いや、白熊といふよりは雪狐と云った方がいいやうなすてきにもくもくした毛皮を着た、いや、着たといふよりは毛皮で皮ができてるといふ方がいゝやうな、ものが変な仮面をかぶったりえり巻を眼まで上げたりしてまっ白ないきをふうふう吐きながら大きなピストルをみんな握って車室の中にはひって来ました。(略)『おい、熊ども。きさまらのしたことは尤もだ。けれどもな、おれたちだって仕方ない。…』(略)『わかったよ。すぐ動かすよ』外で熊どもが叫びました。	宮沢賢治「氷河鼠の毛皮」1923 (下線筆者: 比喩)(原文では、もくもく、ふうふうに「く」の字点」が使用されている)
窓の方に眼を向けると、雪の原には月が一面に青々と光って、なんだか白熊たちは雪達磨をこしらえてゐるのです。	中原中也「夜汽車の食堂」1935



賢治の「氷河鼠の毛皮」の中の白熊は「二十人ばかりのすさまじい顔つきをした人」のことで、「大きなピストルをみんな握って車室の中にはひって来ました」と物騒で動的な様子である。それに対して、中也の「夜汽車の食堂」の中の白熊は「なんだか白熊たちは雪達磨をこしらえてゐるのです」と車窓の外に見える静かなメルヘン風景として描かれている。それを眺

める主人公「僕」は明るい車内にいる。

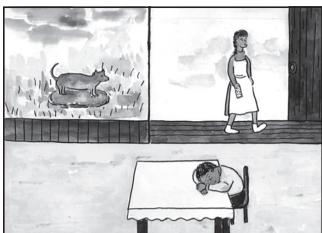
5-4. 人物不在の状況 (太字・筆者)

せいたかくあをじろい駅長の／真鍮棒もみえなければ／じつは駅長のかげもないのだ	宮沢賢治「青森挽歌」1923
ところが改札口には、明るい紫がかった電燈が、一つ点いているばかり、誰も居ませんでした。そこら中を見ても、駅長や赤帽らしい人の、影もなかったのです。(中略) さきに降りた人たちは、もうどこへ行ったか一人も見えませんでした。	宮沢賢治「銀河鉄道の夜」1934
僕のほかにはお客は誰も居なく、どうしたことが、女給も一人も見えないのです。	中原中也「夜汽車の食堂」1935

当然いるはずの人物「駅長や赤帽」（改札口）「客や女給」（車内の食堂）など「誰も居ませんでした」という不思議で、不気味で不安な状況設定が上記三作に共通している。

5-5. 夢だったという結末設定

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのです。胸は何かおかしく熱（ほて）り頬にはつめたい涙がながれていました。 ジョバンニは、ばねのようにね起きました。	宮沢賢治「銀河鉄道の夜」1934 (下線部：比喩)
僕は段々睡くなって、そのうち卓子の上に伏せて眠りましたが、するとお庭の縁側のそばの、陽を浴びた石の上で、尾を立てたり下ろしたりしてゐる、プチ公（犬の名）の夢を見るのです。	中原中也「夜汽車の食堂」1935



賢治の「銀河鉄道の夜」では、ジョバンニとカムパネルラの銀河鉄道の旅が夢だったことが示されているが、中也の「夜汽車の食堂」では、「お庭の縁側のそばの、陽を浴びた石の上で、尾を立てたり下ろしたりしてゐる、プチ公（犬の名）の夢を見るのです」で終わっている。

常識的には、「夜汽車の食堂」の方が夢で、我が家で夢から覚めたと見るほうが順当であるが、「夜汽車の食堂」の方が現実で、我が家の方が夢だったと見るのがより中也的なものかもしれない。

童話としての「夜汽車の食堂」に対して、子どもたちにはどのように反応するだろうか。

冒頭で示した『夜汽車の食堂』の紙芝居を保育園児に見せたところ、「それから…？」とか「そのあと、どうなった？」との声が多数聞かれた。紙芝居のストーリーとしてのもの足りなさ、不十分性が示された感じであった。中也の判断としても未完成であったために未公開とされたのかもしれない。

県民フェスタなどに参加して、山口の朗読屋さんのブースを出して、紙芝居を並べておいても、なかなか『夜汽車の食堂』を選ぶ子供や親はいなかった。『夜汽車の食堂』というタイトルだけでは、興味・関心を示す人が少ないという印象であった。

ちなみに「夜汽車の食堂」の書かれた1935年の3月には、忠犬ハチ公が20歳で亡くなっている。また、同年7月15日に、東京一下関間の特急列車に風呂が設置された。

5-6. 中原中也と金子みすゞ

中原中也と金子みすゞは、どちらも山口県出身であり、二人は直接的な交流はなかったものの、同時代を生きた作家である。両者の着眼点や作風、テーマには大きな違いがある。

林（2024a）は「金子みすゞと中原中也のリレー朗読会」の実践報告を通して、リレー式に朗読する方式の可能性と問題点を検討している。

中也は、自分自身の内面の葛藤や苦悩を表現することが多く、自己愛や自己矛盾をテーマにした作品が多い。中也の作品は、深い悲しみや孤独を感じさせるものが多く、現代でも多くの

人々に影響を与えている。YouTube上の中也の「夜汽車の食堂」の朗読の動画の数は、17点以上にのぼる。(2024年12月8日現在)

一方、金子みすゞは、優しさや利他愛をテーマにした詩が多く、子供向けの童謡詩人としても知られており、他者への思いやりや自然への愛情を表現した作品が多い。金子みすゞの作品は、小学校の教科書の教材として、取り上げられることが多い。(林2024a参照)

6. 金子みすゞ・中原中也の違い「金平糖の夢」「ねんねの汽車」と「夜汽車の食堂」

6-1. 金米糖の夢「金子みすゞ 童謡全集」2022 (JULA出版局)

金米糖の夢
金子みすゞ

金米糖は
夢みてた。
春の田舎の
お菓子屋の
硝子のびんで
夢みてた。
硝子の舟で
海超えて
海のあなたの
大ぞらの
お星になった
夢みてた。

『金子みすゞ 童謡全集』
(JULA出版局二〇二二)
金子みすゞ 童謡絵本『キネマの街』(JULA出版局 (二〇〇一))

みすゞの「金平糖の夢」の「硝子の舟で海超えて海のあなたの大ぞらのお星になった夢みてた」という詩は、硝子のびんの中の金平糖が星になったというメルヘンの世界を表現している。中也の「夜汽車の食堂」で「僕はお母さんやお父さんを離れて、かうして一人でお星の方へ旅することが、なんだか途方もなくつまらなくなる」と心情を吐露しているのとは、対照的である。「お星の方へ旅すること」が、童話（メルヘン）の世界に旅することであるとみすゞは考えたのであろう。

山口の朗読屋さんとしては、2023年に「金子みすゞ『キネマの街』朗読会」を実施したが、絵本『キネマの街』の中にも深沢邦朗の絵入りで「金平糖の夢」が収録されている。

みすゞの詩には汽車を題材にしたものは少ないが、次に示す「ねんねの汽車」がある。

6-2. 「ねんねの汽車」

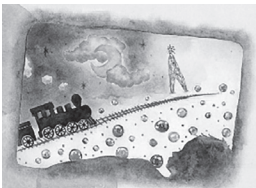


図1 「みすゞの下関」
2号より

ねんねの汽車
金子みすゞ

ねんね寝る子は汽車に乗る、
ねんねの駅を汽車は出る。
汽車の通るは夢のくに、
なんさん玉の地のの上の、
赤い線路をひた走り。
月は明るし、雲は紅、
硝子の塔のてつべんに、
ちらりと白い星も出る。
みんなお窓に見て過ぎて、
おめざの駅へ汽車は着く。
お夢のくにのお土産は、
誰も持つては帰れない。
お夢のくにへゆくみちは、
ねんねの汽車が知るばかり。

6-3. 「夜汽車の食堂」と「ねんねの汽車」の比較

中也の「夜汽車の食堂」とみすゞの「ねんねの汽車」の共通点・類似点と相違点をキーワードを中心に見ておきたい。

次に示すように中也の「夜汽車の食堂」とみすゞの「ねんねの汽車」は、共通の素材（道具立て）が多く、類似点も6項目に及ぶ。子供向けを意識したためなのか、美化語使用も中也に「お月様、お星、お庭」が見られ、みすゞにも「お窓、おめざ、お夢」が用いられている。

(1) 中也「夜汽車の食堂」とみすゞの「ねんねの汽車」の共通点・類似点

	中原中也「夜汽車の食堂」	金子みすゞ「ねんねの汽車」
共通点	汽車・窓・夢・月・星・レール	汽車・窓・夢・月・星・線路
類似点1	レールの上を…遮二無二に走って行く	線路をひた走り
類似点2	卓子の上に伏せて眠りました・・・	ねんねん寝る子は・・・
類似点3	大きなお月様がポツカリと出てゐました	月は明るし・・・
類似点4	一人でお星の方へ旅をする	ちらりと白い星もでる
類似点5	窓の方に目を向けると・・・	みんなお窓に見て過ぎて・・・
類似点6	美化語使用（お月様、お星、お庭）	美化語使用（お窓、おめざ、お夢）

(2) 中也「夜汽車の食堂」とみすゞの「ねんねの汽車」の相違点

	中原中也「夜汽車の食堂」	金子みすゞ「ねんねの汽車」
相違点1	一条（ひとすじ）のレールがあって	赤い線路を・・・
相違点2	雪の原には月が一面に青々と光って・・・	なんきん玉の地のの上の・・・
相違点3	青い青い雪の原を…天井は白いロイドで貼ってあり、飴色の電燈は・・・	雲は紅… 白い星もでる
相違点4	庭の縁側のそば…ブチ公…女中（ねーや）	おめざの駅へ汽車は着く。
相違点5	童話（散文）	童謡詩（韻文）
相違点6	男性作者（まるで星に向かって放たれたロケットのように…）	女性作者（なんきん玉の地のの上の…）

中也の「夜汽車の食堂」とみすゞの「ねんねの汽車」の相違点としては、前者が冬の夜汽車の設定で、「青い雪の原…、天井は白いロイド（セルロイドの意）で貼ってあり、飴色の電燈は…」という色合いで構成され、後者は夕暮れの設定のせいか「赤い線路を…雲は紅… 白い星もでる」という色合いで構成されている点である。中也「夜汽車の食堂」には、「白い大きいゾーレ（ベレー帽の意）をかぶり、青い洋服に薄い焦茶のストッキングをはいた、大きなアメリカの小母さん」が登場するが「ねんねの汽車」には「ねんねん寝る子」がいるだけである。

また、「夜汽車の食堂」には、到着駅は示されていないが、「ねんねの汽車」には「おめざの駅に汽車は着く」と到着点が表示されている。夢から覚めたところで、夢の国への旅は終わる。用語としては、「夜汽車の食堂」の「レール」が、「ねんねの汽車」の「線路」となっているように前者に外来語の使用が目立つのに対して、後者は、外来語の使用が見られない。

6-4. みすゞの「月」の表現



前述の「4-1の月の表現」の項で賢治の「氷河鼠の毛皮」「月夜のでんしんばしら」と中野の「夜汽車の食堂」の月の表現について比較検討したが、みすゞの「月」の表現も見ておきたい。

以下に示す「キネマの街」も、「あおいキネマの月が出てキネマの街になりました」から始まる。絵本のタイトルも同詩のタイトルから取って『キネマの街』とされており、表紙には左のような深沢邦朗の絵が示されている。

6-5. みすゞの「月」の表現；『キネマの街』（太線・筆者）

金子みすゞ 童謡絵本 『キネマの街』JUL A 出版局（二〇〇一）	キネマがえりに 月が出て 見知らぬ街に なりました。	こわい マドロス 来やせぬか。	黒猫 屋根に 居やせぬか。	あおいキネマの 月が出て キネマの街に なりました。	キネマの街 金子みすゞ

青い月の光のもとで「屋根に黒猫居やせぬか」と心配したり、「こわいマドロス来やせぬか」と不安がっている一方で「キネマがえりに月が出て見知らぬ街になりました」と昼間とは別世界になった驚きが表現されている。「青い月の光」のおかげで異世界が現れるという体験を詩にしていると言ってもいいであろう。

『キネマの街』には、「たった一人のお月さま、／東の山からあがった。／街を飾ってやろうとて、／銀のヴェールを投げかけた。」との一連が含まれている「月と泥棒」が収録されている。間の抜けた泥棒たちを優しく見守る月が、ユーモラスに描かれている。

（注1）「冬の夜汽車で」は国文学研究資料館「近代書誌・近代画像データベース」で、見ることができる。<https://school.nijl.ac.jp/kindai/NCMM/NCMM-00215.html#214>

（注2）「銀河鉄道の夜」は1924年ごろに初稿が執筆され、晩年の1931年頃まで推敲が繰り返された後、1933年の賢治の死後、草稿の形で遺された。初出は1934年刊行の文園堂版全集（高村光太郎ら編。全国書誌番号:47022638）である。本稿では1934年の作品として扱い、三起商行発行の『銀河鉄道の夜』を参照した。同書には、「一条（いちじょう）の鉄道線路」と読み方のルビがふられている。

（注3）辞典メディア【Shoply ワード辞典】：楽天市場アプリをダウンロードすることで、お得な情報やキャンペーン情報を受け取ることができる。利用者はいつも最新の情報を手に入れることができる。「日々新しいワードを紹介している」とのこと。

（注4）しゃちこばる➡しゃちほこばる<鯨張る（しゃちこばる）の意味・由来・語源>いかめしく構えるという意味の「さしこはる（差し強る）」が変化した「しゃちこばる」

の「しゃち」を「しゃちほこ（鯨）」と語源解釈して「しゃちほこばる」という形になった。しゃっちこーば・る【鯨張】自動詞・ラ行五（四）「しゃちこばる（鯨張）」の変化した語。[初出の実例]「何か体をぎくしゃくとしゃっちこ張（バラ）せて入来る様子」（出典：滑稽本・七偏人（1857-63）初）以上『精選版日本国語大辞典』より

【参考文献】

- いいだも・中村稔対談（2003）＜「銀河鉄道の夜」と「夜汽車の食堂」をめぐって＞中原中也記念館発行『中原中也研究』第八号、pp.30-52
- 金子みすゞ（2001）『金平糖の夢』『月と泥棒』『キネマの街』『キネマの街』JULA出版
- 金子みすゞ「ねんねの汽車」『みすゞの下関』2号、2023年7月梓書店発行
- 中原中也（1934年10月～1935年1月）「夜汽車の食堂」（『新編中原中也全集 第四巻 評論・小説』角川書店2003（平成15）年11月25日初版発行、pp.429-430）
- 中原中也（1936）「一つのメルヘン」1936（昭和11）年『文芸汎論』11月号に発表（『中原中也全詩集・中原中也』角川文庫、2007（平成19）年初版発行、pp.230-231）
- 長山靖生篇（2017）『詩人小説精華集』彩流社
- 名柄廸・広田紀子・中西家栄子（1987）『外国人のための日本語・例文問題シリーズ2・形式名詞』荒竹出版、pp.80-82
- 林 伸一（2024a）「金子みすゞと中原中也のリレー朗読会―実践報告と今後の可能性・問題点―」山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第47号、pp.91-106
- 林 伸一（2024b）「絵本や紙芝居に見るヤングケアラーの問題―子供の人権について―」山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第74巻、pp.85-98
- 増井金典（2021）『日本語源広辞典〔増補版〕』ミネルバ書房、p.496
- 宮沢賢治（1923）「青森挽歌」（『宮沢賢治全集1』ちくま文庫、筑摩書房（1986）を底本とした『青空文庫』宮沢賢治『春と修羅』2011年5月11日修正版を参照）
- 宮沢賢治（1923）「氷河鼠の毛皮」（『新修宮沢賢治全集 第十三巻』筑摩書房1980（昭和55）年3月15日初版第1刷発行。初出は「岩手毎日新聞」1923年4月15日）
- 宮沢賢治（1934）「銀河鉄道の夜」（『銀河鉄道の夜』絵・金井一郎、三起商行発行、2013）

【謝辞】

本稿の検討段階において、「こどもと本ジョイントネット21・山口」の山口智子さんに、資料提供と問題提起をしていただいた。また、中原中也記念館名誉館長の福田百合子先生にいろいろと助言をいただいた。さらに山口の朗読屋さんのメンバーに原稿段階での検討をもらった。この場を借りて、心から感謝の意を表したい。また、本稿の基となった紙芝居『夜汽車の食堂』の絵の作者さとうみちこ氏に感謝したい。

（はやし・しんいち）